

Rakowski, Cathy A. ed., *Contrapunto: The Informal Sector Debate in Latin America*. Albany. State University of New York Press, 1994, x+336p.

発展途上国のインフォーマルセクターに関する議論および研究は1970年代初頭、その用語が誕生したのち、発展論の一角を形成してきた。ラテンアメリカにおいても、ILO-PREALCを中心とした構造主義的なアプローチから始まり、H. de Sotoの登場、そして多くの実証研究の積み重ねという潮流がある。本書は以上のインフォーマルセクター論の発展の流れを踏まえて、今一度論争を整理し、今後の研究と開発政策を展望することを試みた論文集である。

全体は5部、14章からなる。第1部は1970～93年までの議論を鳥瞰した上で、メキシコの事例を中心に多様な機能をもつインフォーマルセクターの実態を浮き彫りにする。第2部はマクロな経済政策上の議論で、工業化政策の転換過程におけるインフォーマルセクターの機能の変容を考察する。第3部は、国家やNGO等が、いかにインフォーマルセクターに関与しつつその発展の後押しをすることができるかを分析する。第4部では、インフォーマルセクターと貧困の問題との関係が問い直されている。いずれの論文も、80年代の経済危機以降、インフォーマルセクターの経済発展上で果たす役割が経済政策上積極的に評価され、同セクターに対する開発戦略自体が変化していることを視角に入れている。

筆者はラテンアメリカにおけるインフォーマルセクター論の長年の論客ぞろいである。経済学、開発政策の分野から発展したインフォーマルセクター論に対して、社会学・人類学の分野から事例研究に基づき批判的論争を続けてきた研究者(Portes, de Oliveira, Roberts, Bromley等)の論点には、きわめて説得力の高い示唆が含まれている。

(幡谷則子)

遅野井茂雄著『現代ペルーとフジモリ政権』
(アジアを見る眼91) アジア経済研究所
1995年 vi+225ページ

本書はペルー政治の研究者である著者が、現代ペルーの政治史を一般読者にもわかりやすい形で纏めたものである。

今年4月、フジモリ大統領は約65%の高得票率で再選を果たした。本書は同氏の1990年の大統領選出馬から今年の選挙直前まで、約5年間の波乱に富んだ政権のあゆみを簡潔な解説を加えながらたどってゆく。そして、フジモリ政権が果たした経済改革の成果、フジモリの政治スタイルがペルー国民に支持される理由、今後の課題などについて考察する。

本書の前半部分は、いわばフジモリ政権前史という形になっている。序論で植民地時代から1950年までのペルーの歴史と社会形成の過程を、第2章で、1950年代から1970年代まで軍事政権下で行なわれたさまざまな試みと急速に進んだ社会構造の変化を、第3章で80年代のペラウンデ、ガルシアという民主政権の失墜の過程をたどってゆく。読者はこれにより、ペルー社会が現在抱えるさまざまな問題がどのような歴史的経緯のもとに派生してきたのか理解することができる。

筆者は、現地での研究生活も長く、豊富なエピソードが盛り込まれており、本書の魅力を引き立てている。
(村井友子)

高懸雄治著『ドル体制とNAFTA：中枢＝周辺関係の現代的構図』青木書店 1995年 238ページ

日米経済、途上国の債務危機、そしてNAFTAに焦点を据えて、ドル体制を解剖することが本書の目的である。こうした分析枠組みの背景には、ラテンアメリカを中心とする途上国の対外債務累積・債務

危機、NAFTAの形成は、とりもなおさずドル体制、そして米国資本主義の危機にほかならないとの著者の認識がある。

第I部は米国の債務国化を扱っている。そのなかで米国による金・ドル兌換停止(1971年)を後の途上国の債務累積を含む国際金融危機の根源と見なしている。第II部ではラテンアメリカなど途上国の債務危機の発生、債務対策を論じているが、先進国銀行による貸付は高利貸的性格をもち、棒引きを含むその軽減は債務問題解決にとって不可避であると主張している。第III部ではNAFTAを扱っているが、著者はそれを巨大な貿易赤字に悩む米国によるラテンアメリカ市場の支配、米国製品の輸出拡大の手段と断じている。

ラテンアメリカの債務問題、地域統合をドル、米
国経済との関連で理解するのに有益な一書であろう。

(小池洋一)

淵上英二『日系人証明：南米移民、日本への出稼ぎの構図』新評論 1995年 280ページ

南米からの日本への出稼ぎ者は日系人全体の2割にも達すると言われる。本書は、多数の南米日系人の日本への出稼ぎの経済・社会的な背景、そして出稼ぎが日系人社会にもたらしている変化を、ペルー、ボリビア、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイでの取材によって生き生きと描き出している。日系人は奥地の農村で、あるいは都市近郊でさまざまな人生を過ごし、現地社会への同化、異化などを経験してきた。

出稼ぎは、自分たちが一体誰であるかどうかを強制的に確認する機会、日系人のアイデンティティ証明のための旅と言える。本書は、出稼ぎによって日本人として意識に目覚め日本の文化を継承しようとするもの、さらには小日本を建設しようとするもの、逆に日本において外国人であることを認識し、母国への同化を受け入れるものなど、国により、また地域により出稼ぎが日系人の心情にもたらしたさまざまな姿を紹介している。評者の考えではこうした多様性こそ普通なのであり、人と社会の現実の関係なのである。同化、異化といった概念自体が、少なくとも意識のうえでは民族的単一性のもとにある日本人の所産にも見えてくる。

南米日系人がおかれている状況そして日本人とは何かを考えるうえで、一読に値する書である。

(小池洋一)

Insituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática-INEGI, *Estadísticas Históricas de Mexico*, Aguascalientes, 1994, 2vols.

本書はメキシコの統計の歩みを紐解くにふさわしい統計データ集である。

掲載統計の対象期間は1800年代から1992年までの、主にナショナル・レベルでのデータを22項目(人口、教育、住居、保健、賃金、雇用、農業改革、国内総生産、農業・牧畜・漁業・植林、鉱業、石油産業、光熱産業、製造業、商業、通信・運輸、投資、財政、貿易、価格、通貨・金融、都市化)にわたり取りまとめている。なお、各項目にはデータの変遷や概要、手法が付されている。

掲載データが膨大なため2分冊となっている。

最新1993年についてのいくつかの指標はINEGIの統計年鑑1994年版(既刊)で入手可能である。

本書の形式による編纂は第1回が1985年に、第2回が1990年に、そして今回が第3回目となっている。

近年における統計利用者の需要に答えたINEGIおよび関係分野の専門家による、ラテンアメリカ諸国では稀な労作といえよう。

(相原好江)